

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 24 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21730465

研究課題名（和文）高齢者をケアする男性家族介護者のストレス過程についての実証的研究

研究課題名（英文）Empirical study of stress processes of male family care-givers providing care for the elderly

研究代表者 菊澤 佐江子（KIKUZAWA SAEKO）

法政大学・社会学部・准教授

研究者番号：70327154

研究成果の概要（和文）：

本研究は、近年増加傾向にある男性家族介護者に注目し、高齢者介護において男性家族介護者の抱えるストレスの過程とインフォーマル・フォーマルな介護者支援との関連を、女性家族介護者との比較により、ストレス論的視点から実証的に明らかにすることを目的として行われた。分析の結果、男性家族介護者のストレス過程は女性家族介護者と共通する部分もあるが異なる部分もあること、また、その内容は要介護者との続柄によってやや異なる可能性が示された。

研究成果の概要（英文）：

This study shed the light on the state of male family caregivers who are increasing in number these days, by conducting empirical analyses to explore the stress processes of male family caregivers to the disabled elderly and their associations with informal and formal support for the caregivers, in comparison to those of female family caregivers, based on the social stress framework. The results show the possibility that there are some similarities and differences between the stress processes of male and female family caregivers, and that the gender differences in those processes depend on the relationships between caregivers and the disabled elderly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1170,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1500,000	450,000	1950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：高齢者ケア、家族、ストレス

1. 研究開始当初の背景

近年、家族介護者に占める男性介護者の割合は増加傾向にある。高齢者介護に携わる在宅介護者の中では、男性介護者はきわめて少数派であるが、その一方で、近年の介護殺人・心中事例の多くは男性によるものであることが知られている。男性のストレス過程は女性と異なる可能性もあり、そうしたことがこのような結果を生じている可能性もあることから、学術的にも政策的にも、男性介護者のストレス過程と支援上の課題を明らかにすることは急務であると思われる。

しかし、高齢者ケアに携わる家族介護者のストレスについての研究には一定の蓄積があるものの、これまで女性介護者が多数を占めていたため、男性介護者のストレスに関する研究は極めて限られている。限られた研究によると、男性介護者がストレス状況に陥りやすい原因の一つとして、現行のフォーマル・インフォーマルな支援が、男性介護者のストレス軽減に効果的でない可能性が示唆されるものの、具体的に現在の支援のあり方のどのような点に問題があるのかは未だ十分明らかにされていない。そこで本研究では、これまでみえにくかった男性家族介護者とそのストレス過程に意識的に目を向けようと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、これまで少数派であった男性家族介護者に注目し、男性介護者の抱えるストレス過程と現行のインフォーマル・フォーマルな介護者支援との関連の特徴を、女性介護者との比較等を通じて、ストレス論的観点から実証的に明らかにするとともに、支援上の課題を考察することを通じて、今後の福祉

施策に資することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、マルチメソッド（質的・量的手法の組み合わせ）により、高齢者介護に携わる男性介護者のストレスの実態と現行のフォーマル・インフォーマルな支援の効果と課題を多角的に明らかにすることを試みた。

（1）量的手法による分析：男性介護者・女性介護者双方のおかれた状況について豊富な情報を含む既存マイクロデータの分析を通じて、高齢者介護における男性介護者のストレス及びその関連要因の特徴、特に介護保険等によるフォーマルサポートやインフォーマルサポートの利用状況およびその効果の全国的パターンを、男女介護者間の比較を通じて、統計的に明らかにする。（なお、4では主に東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから提供を受けた「介護サービス実態調査2001」（財団法人連合総合生活開発研究所）データを用いた分析結果を中心に報告する。）

（2）質的手法による分析：男性介護者（介護経験者）の手記の内容分析及びインタビュー調査等を女性介護者のものと併せて行うことを通じて、量的分析で得られた結果の背景にある具体的なストレスメカニズム及びそのプロセスについて、当事者視点から明らかにする。

4. 研究成果

（1）分析結果

①ストレスアウトカムの状況

ストレスアウトカムの尺度として「憎しみ感情」を用い、量的分析を行った結果、男性間では、配偶者や義理の親の介護をしている

者よりも実親介護をしている者に憎しみ感情がやや大きいという、女性間のパターンとは異なる傾向がみられた。一方、女性間では、実親よりも配偶者や義理の親を介護している者に憎しみ感情が大きく、結果として、続柄ごとに男女を比較した場合、配偶者介護、義理の親の介護においては、女性のほうが男性より平均値が高い一方、実親の介護における性差はみられなかった。

② ストレッサー・緩衝要因等の状況

男性介護者の介護する要介護者の状態は、続柄別にみる限り、女性介護者の介護する要介護者の状態とさほど変わらなかった。緩衝要因については実親の介護において男女差がみられ、介護協力者をもつ者の割合は息子のほうが娘より有意に多かった。年齢は男女ともに、配偶者介護で70歳前後、実親や義理の親の介護で50歳代前半であったが、健康状態は、いずれの場合も、男性のほうが女性より健康な者が多かった。

なお、分析対象となったデータに相対的に若い者が多かったことを反映し、続柄別には男女とも配偶者介護より親の介護に携わる者が多かった。

③ ストレッサー・緩衝要因等とストレスアウトカムとの関連

憎しみ感情の男女差がどのようなメカニズムで生じているのか、又男性介護者のストレッサー・緩衝効果は女性介護者のそれとどのように異なるのか、といった点を探るために、続柄別に階層的重回帰分析を行った結果、続柄ごとに異なる結果が観察された。まず、配偶者介護における男女差（性の重回帰係数）は、当初顕著であったが、緩衝要因の投入でやや小さくなり、交互作用の投入により顕著でなくなる一方、介護協力者の有無、訪問介護利用、及び、介護協力者や訪問介護利用と性との交互作用と憎しみ感情との間に

有意な関連がみられた。具体的には、妻介護の場合には介護協力者がいる者のほうがいない者に比べて憎しみ感情は有意に大きい傾向がみられ、訪問介護利用の憎しみ軽減効果は、夫介護の場合にみられた。

一方、実親介護においては、男性の憎しみ感情は女性とほぼ変わらない状況であることが示されるとともに、健康、要介護者の状態、ショートステイ利用、要介護者の状態と性との交互作用が、憎しみ感情と有意な関連を示した。交互作用は、娘の場合には、実親の状態が重いほど憎しみ感情は小さいが、息子にはそうした傾向がみられないことを示していた。なお、義理の親の介護における男女差の分析については、男性介護の中でもとりわけ婿による介護のケース数が限られていることから、量的分析上難しい側面もあることが明らかとなった。

(2) 考察

量的分析の結果について、アンケート調査における自由記述の内容及びインタビューや手記の分析等で得られた情報とつきあわせつつ考察を行った。まず、第1に、記述的分析によると、少なくとも憎しみ感情という点においては、全体として、男性介護者のほうが女性介護者より大きいという結果は得られなかった。むしろ、配偶者介護、義理の親の介護において、女性家族介護者のほうが男性家族介護者よりも、要介護高齢者に対して強い憎しみ感情を抱く傾向がみられた。また、男性家族介護者におけるストレッサー・緩衝要因の状況は、女性家族介護者とほぼ同じで、実親介護については、全体的にみると、息子のほうが娘より介護協力者がいる者が多い様子が示された。

第2に、重回帰分析の結果、男性家族介護者におけるストレス関連要因が憎しみ感情

を生じたり抑制したりする過程は、女性家族介護者とやや異なること、そして、ストレス緩衝効果が男女で異なることが、憎しみ感情の性差と関わっている可能性が示された。たとえば、性差の顕著であった配偶者介護において、妻には介護協力者のストレス緩衝効果がみられず、また、訪問介護利用の緩衝効果も夫に顕著にみられた。介護協力者や訪問介護サービスが真に現場に生きるものとなるためには、今後このような外部からの支援が、要介護者のみならず要介護者と介護者を含む生活状況への介入であるという側面に留意しつつなされることが大切であると考察される。

第3に、男性介護者・女性介護者と一般的に性別で分けてひとくくりにされがちであるが、ストレスの影響や緩衝効果の性差といったストレス過程の性差を考えるうえでは、要介護者に対する介護者の続柄も併せて検討することが大切であることも示唆された。たとえば、実親介護においては、配偶者介護のような緩衝効果の性差はみられない一方、要介護者の状態の影響が、娘・息子間では異なっており、介護している親の状態が重いほど憎しみ感情は小さいという傾向が、息子にはみられないが、娘には顕著にみられることが示された。実親介護の場合には、配偶者介護の場合とは異なる側面として、直系家族規範における娘介護・息子介護の性格や、親子の情緒的親密さの性差といった側面や、介護者の年齢も若いことから、中年期というライフステージにおける役割状況の性差といった側面を、家族介護の背景として考慮する必要があると思われる。

第4に、男性介護者の場合も、女性介護者の場合と同様、健康状態が悪くなることが要介護者に対する憎しみ感情の大きさと関連するという結果がほぼ一貫してみられたこ

とは、家族介護者の健康状態に配慮した、家族介護者に無理をさせない介護施策の整備が、男女家族介護者の支援、そして最終的な要介護高齢者の支援という観点から、求められていることを示唆している。

最後に、本研究の限界と課題であるが、今回の量的分析においては、ストレスアウトカムの指標が一つに限られていたこと、説明変数の内容や対象者の数・代表性という点で限られていること、調査データが一時点のものであること等による限界があった。この研究で得られた知見や新たな問題意識を、さらに精度の高い調査研究へと発展させていくことが、残された課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

菊澤 佐江子 「ジェンダーと介護ストレス—高齢者介護の場合—」 『家族関係学』30号、2011、179—187頁(査読有り)

〔学会発表〕(計1件)

Saeko Kikuzawa, Gender and Mental Health of Family Caregivers in Japan. 106th Annual Meeting of American Sociological Association, August 22, 2011, Las Vegas, Nevada, U. S. A.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊澤 佐江子 (KIKUZAWA SAEKO)

法政大学・社会学部・准教授

研究者番号：70327154

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし